

無量壽

平成16年1月1日
浄土真宗 本願寺派
林徳寺 発行
025 - 276 - 3456

浄土真宗物語③

一二二四（建保二）年聖人は、家族を伴われて関東に向かわれる途中、今の長野県長野市の善光寺を参拝されたと伝えられています。善光寺は一光三尊阿弥陀如来（秘仏）を本尊とするお寺で、



善光寺本堂

全国を回って信仰を説いた善光寺聖の活躍もあり、阿弥陀様信仰の中心となっていました。現在は天台宗浄土宗それぞれの別格本山です。さてその後、聖人は常陸の国小島の郡司、小島武弘の招きに応じて小島の草庵（茨城県下妻市小島）に三年ほど住まわれました。現在草庵跡には、古碑と、聖人を慕ったといわれる「稲田恋し銀杏」があります。また、「当地において恵

信尼様が、聖人が観音菩薩の化身であるとの夢告を受けた」ということが、末娘覚信尼様へ宛てた手紙の中に記されていることでも知られています。



小島の草庵あと

その後聖人はこの小島の地を離れ、笠間郷稲田（茨城県笠間市稲田）の草庵に落ち着かれました。聖人四五歳の時です。聖人はこの稲田の草庵に、二〇年間お住まいになりました。この稲田の草庵跡に建てられているのが『西念寺』というお寺です。また、この二〇年間に関東地方に聖人の教えが広まり、多くの門徒が誕生しました。その代表的な一派である「高田門徒」の中心であった真佛上人の旧跡であり、聖人も一時逗留されたと伝えられているのが現在の『専修寺』（栃木県芳賀郡二宮町高田）です。この『西念寺』『専修寺』を訪ねたのが昨年五月に実施した林徳寺の団体旅行です。特に

『西念寺』は、浄土真宗の根本聖典である『教行信証』を聖人がお書きになった寺として非常に大切なところで、浄土真宗の門徒は、一生に一度は参拝したい寺であります。関東での聖人の直弟子は四四人、孫弟子の中でお会いして教えを受けたものと、聖人の手紙やその他の人前後の門弟があつたこととなります。後には、これらの門弟がそれぞれ建立した寺院のうちから、主だったものを参拝して回る『関東



西念寺にて

書面に名前が出ているものをあわせれば七〇



専修寺

二十四輩巡り』が行われるようになりました。その詳細は次号で紹介します。

浄土真宗の作法・心得（シリーズ3）

お経

『お経』は、お釈迦様の説かれたことばを、そのお弟子たちが、聞いたままを文字に記録して、伝えてきたものです。従って『お経』の最初は、「如是我聞」—このように我は聞いた—という言葉で始まっているのが普通です。私たちはこの『お経』を古い時代に中国で漢文に翻訳したものを、そのままの形で現在も拝読しています。

ですから、『お経』の意味がわからないという言葉を聞くのも、無理がないといえます。しかし、『お経』を拝読する、あるいは読経を聞く、いずれもお釈迦様のお説法を聴聞していることと同じだ、と受け止めて、その間は厳粛な気持ちを保ちたいと思います。また、『お経』

如是我聞・一時仏在舎衛國祇樹給孤独園…

私はこのように聞きました。ある時お釈迦様が舎衛國の祇樹給孤独園（祇園精舎）におられ…

仏説阿彌陀經



昨年の除夜会

例年、十二月三十一日の午後十一時半頃から、除夜の鐘をつき始めます。本堂では甘酒の接待もいたしておりますので、どうぞ御参拝下さいませようお待ちいたしております。

除夜会参拝のご案内

の本を人が歩く畳の上に直接置くことは、絶対に避けたいものです。必ず膝の上や経本を入れてきた入れ物の上などに置きましよう。お釈迦様は、聞く人に応じて様々な形でその『お悟り』の内容を伝えて下さいました。これを「応病与薬（病にに応じて薬を与える）」あるいは「対機説法（機相手に応じて法を説く）」といいます。従って仏教には八万四千といわれる多くの『お経』があります。その中で浄土真宗では、『仏説無量寿經』『仏説觀無量壽經』『説阿彌陀經』を正依の經典『浄土三部經』として大切にしているのです。

日本語になった仏教の言葉 ⑥

《油断》

この言葉は、涅槃經の説話から出ています。国王が家臣の心を試みるために、油をいっぱい入れた鉢を両手で高く捧げて持たせ、王宮の北門から南門まで歩かせて、もし一滴でも落とすならば命を断つぞと、後ろから刀を振り上げてついて行きました。家臣は一心不乱に進んで一滴も落とさなかったので王は大いに嘆賞して第一の大臣にしたというのです。

私どもは、もう一度し直すことのできない大切な人生を生きているのです。蓮如上人の「往生の期も、いまや、きたらんと、油断なく、そのかまへは候」との仰せをきくとき、私どもに、そのかまへができていないでしょうか。「油断ばかりしておつては、後悔するぞ」との上人のお言葉を深く深く味わいたいと思います。

『私たちの言葉』経合芳隆より